

鷄

森鷗外

青空文庫

石田小介が少佐参謀になつて小倉こくらに着任したのは六月二十四日であつた。

徳山と門司もじとの間を交通している蒸気船から上がったのが午前
三時である。地方の軍隊は送迎がなかなか手厚いことを知つてい
たから、石田はその頃の通常礼装らいさうというのをして、勲章を佩おびて
いた。故参の大尉参謀が同僚を代表して棧橋さんばしまで来ていた。

雨がどつどと降っている。これから小倉までは汽車で一時間は
掛からない。川卯かわわうという家で飯を焚たかせて食う。夜が明けてから、
大尉は走り廻つて、切符の世話やら荷物ものぶつの世話やらしてくる。

汽車の窓からは、崖がけの上にびっしり立て並べてある小家が見え

る。どの家も戸を開け放して、女や子供が殆ど裸でいる。中には丁度朝飯を食っている家もある。仲為のような為事をする労働者の家だと士官が話して聞せた。

田圃の中に出る。稲の植附はもう済んでいる。おりおり蓑を着て手籠を担いで畔道あぜみちをあるいている農夫が見える。

段々小倉が近くなって来る。最初に見える人家は旭町あさひまちの遊廓うかくである。どの家にも二階の欄干に赤い布団が掛けてある。こんな日に干すのでもあるまい。毎日降るのだから、こうして曝すのであろう。

がらがらと音がして、汽車が紫川むらさきがわの鉄道橋を渡ると、間もなく小倉の停車場に着く。参謀長を始め、大勢の出迎人がある。

一同にそこそこに挨拶をして、むろまち室町の達見たつみという宿屋にはいつた。

隊から来ている従卒に手伝つて貰つて、石田はさつそく正装に着更きかえて司令部へ出た。その頃は申告しかたの為方ななんぞは極きまつていなかったが、廉かどあつて上官えつに謁えつする時ときというので、着任の挨拶は正装せいさうですることになつていた。

翌日も雨が降つている。鍛冶町かじに借家かがあるというのを見に行く。砂地であるのに、道普請みちうらに石灰屑くすを使うので、薄墨色うすすみの水が町を流れている。

借家は町の南側になつている。生垣なまかきで囲んだ、相応な屋敷である。庭には石灰屑くすを敷かないので、綺麗きれいな砂が降るだけの雨を皆

吸い込んで、濡れたとも見えずにいる。真中に大きな百日紅さるすべりの木がある。垣の方に寄つて夾竹桃きようちくとうが五六本立っている。

車から降りるのを見ていたと見えて、家主が出て来て案内をする。渋紙しぶがみ色の顔をした、萎びた爺さんしなじいである。

石田は防水布の雨覆あまおおいを脱いで、門口を這入はいつて、脱いだ雨覆を裏返して巻いて縁端えんばなに置こうとすると、爺さんが手に取つた。石田は縁を濡らさない用心かと思ひながら、爺さんの顔を見た。爺さんは言訣いいわけのように、この辺へんは往来から見える処ところに物を置くのは危険だということを話した。石田が長靴を脱ぐと、爺さんは長靴も一しよに持つて先に立つた。

石田は爺さんに案内せられて家を見た。この土地の家は大小の

違ちがいがあるばかりで、どの家も皆同じ平面図に依よつて建てたように出来ている。門口を這入こつて左側が外そと壁かべで、家は右の方へ長方形に延びている。その長方形が表側と裏側とに分れていて、裏側が勝手になつていたのである。

東京から来た石田の目には、先まず柱が鉄べん丹がらか何かで、代たい赭しやのような色に塗つてあるのが異様に感ぜられた。しかし不快だとも思わない。唯この家なんぞは建ててから余り年数を経たものではないらしいのに、何となく古い、時代のある家のように思われる。それでこんな家に住んでいたら、気が落ち付くだろうというような心持がした。

表側は、玄関から次の間まを経て、右に突き当たる西の詰つめが一番

好い座敷で、床の間が附いている。爺さんは「一寸御免なさい」と云つて、勝手へ往つたが、外套と靴とを置いて、座布団と煙草盆とを持って出て来た。そして百日紅の植わっている庭の方の雨戸が疎らに締まつているのを、がらがらと繰り開けた。庭は内から見れば、割合に広い。爺さんは生垣を指さして、この辺は要塞が近いので石塀や煉瓦塀を築くことはやかましいが、表だけは立派にしたいと思つて問い合わせてみたら、低い塀は築いても好いそうだから、その内都合をしてどうかしようと思つていと話した。

表通は中くらの横町で、向いの平家の低い窓が生垣の透間から見える。窓には竹簾が掛けてある。その中で糸を引いて

る音がぶうんぶうんとねむたそうに聞えている。

石田は座布団を敷居の上に敷いて、柱に寄り掛かつて膝を立て、ポツケツトから金天狗を出して一本吸い附けた。爺さんは縁端にしゃがんで何か言っていたが、いつか家の話が家賃の話になり、家賃の話が身の上話になった。この薄井という爺さんは夫婦で西隣に住んでいる。遅く出来た息子が豊津の中学に入れてある。この家を人に貸して、暮しを立てて倅の学資を出さねばならないということである。

それから裏側の方の間取を見た。こちらは西の詰が小さい間になつている。その次が稍や広い。この二間が表側の床の間のある座敷の裏になつている。表側の次の間と玄関との裏が、半ば土間

になつてゐる台所である。井戸は土間の隅に掘つてある。

縁側に出て見れば、裏庭は表庭の三倍位の広さである。所々に蜜柑みかんの木があつて、小さい実が沢山な生つてゐる。縁に近い処には、瓦かわらで築いた花壇があつて、菊が造つてある。その傍そばに円石まるいしを畳んだ井戸があつて、どの石の隙間すきまからも赤い蟹かにが覗のぞいてゐる。花壇の向うは畠はたけになつていて、その西の隅に別当部屋の附いた厩うまやがある。花壇の上にも、畠の上にも、蜜柑の木の周囲まわりにも、蜜蜂みつばちが沢山飛んでゐるので、石田は大そう蜜蜂の多い処だと思つて皆さんに問うて見た。これは爺さんが飼つてゐるので、巢は東側の外壁に吊り下げてあるのであつた。

石田はこれだけ見て、一旦いったん爺さんに別れて帰つたが、家はか

なり気に入ったので、宿屋のお上かみさんに頼んで、細かい事を取り極めて貰つて、二三日立つて引き越した。

横浜から舟に載せた馬も着いていたので、別当に引き入れさせた。

勝手道具を買う。膳ぜん碗わんを買う。蚊帳かやを買う。買いに行くのは従卒の島村である。

家主はまめな爺さんで、来ていろいろ世話を焼いてくれる。膳碗ぜんわんを買うとき、爺さんが問うた。

「何人前いらしまするかの。」

「二人前です。」

「下しものものはいらませんか。」

「僕のと下女のとで二人前です。従卒は隊で食います。別当も自分で遣やるのです。」

蚊帳は自分のと下女のと別当のと三張みはり買った。その時も爺さんが問うた。

「布団はいりませんか。」

「毛布があります。」

万事こんな風である。それでも五十円程掛かった。

女中を傭やとうというので、宿屋の達見のお上さんが口入屋くちいれやの上さんをよこしてくれた。石田は婆あさんを置きたいという注文をした。時という五十ばかりの婆あさんが来た。夫婦で小学校の教員の弁当をこしらえているもので、その婆あさんの方が来てくれ

たのだそうだ。不思議に饒舌しやべらない。黙つて台所をしてくれる。

二三日立つた。毎日雨は降つたり歇やんだりしている。石田は雨覆をはおつて馬で司令部に出る。東京から新あらたに傭つて来た別当の虎吉が、始とて伴ともをするとき、こう云つた。

「旦那だんな。馬の合羽かつぱがありませんがなあ。」

「有る。」

「ええ。それは鞍くらだけにかぶせる小さい奴やつならあります。旦那の膝ひざに掛けるのがありません。」

「そんなものはいらぬ。」

「それでもお膝ひざが濡ぬれます。どこの旦那だんなも持もつています。」

「膝ひざなんざあ濡ぬれても好いい。馬装ばさうに膝掛ひざかなんというものはない。」

外の人を持つておつても、己おれはいらない。」

「へへへへ。それでは野木さんのお流儀で。」

「己がいらないのだ。野木閣下の事はどうか知らん。」

「へえ。」

その後は別当も敢て言わない。

石田は司令部から引掛ひきがけに、師団長はじめ上官の家に名刺を出

す。その頃は都督ととくがおられたので、それへも名刺を出す。中には

面会せられる方もあるかた。内へ帰つてみると、部下のものが名刺を

置きに来るので、いつでも二三枚ずつはある。商人が手土産なん

ぞを置いて帰つたのもある。そうすると、石田はすぐに島村に持

たせて返しに遣る。それだから、島村は物を貰うのを苦に病んで

いて、自分のいる時に持って来たのは大抵受け取らない。

或日帰つて見ると、島村と押問答をしているものがある。相手は百姓らしい風体ふうていの男である。見れば鶏の生きたのを一羽持っている。その男が、石田を見ると、にこにこして傍そばへ寄つて来て、こう云つた。

「少佐殿。お見忘になりましたか知れませんが、戦地でお世話になつた輜重しちゆうゆうそつ卒あそつの麻生でござります。」

「うむ。軍司令部にいた麻生か。」

「はい。」

「どうして来た。」

「予備役になりましたして帰っております。内は大里だいりでござります。」

少佐殿におなりになって、こちらへお出だいでということ聞きまして、御機嫌伺うかがいに参りました。これは沢山飼つております内の一羽でござりますが、丁度好い頃のでござりますから、持つて上りました。」

「ふむ。立派な鳥だなあ。それは徴発ではあるまいな。」

麻生は五分刈の頭を搔かいた。

「恐れ入ります。ついみんなが徴発徴発と申すもんでござりますから、ああいうことを申しましてお叱しかりを受けました。」

「それでも貴様はあれきり、支那人シナの物を取らんようになったか
ら感心だ。」

「全くお蔭かげを持ちまして心得違がを致しませんものですから、
凱がいせ

旋だいたしますまで、どの位肩身が広がったか知れませぬ。大連だでみんなが背はい囊のうを調べられましたときも、銀かんの簪ざしが出たり、女の着物が出たりして恥を搔く中で、わたくしだけはお息張いばりでござりました。あの金きん州しゅうの鶏けいなんぞは、ちゃんか、ほい、又お叱を受け損う処ぬしでござりました、支那人が逃げた跡に、卵を抱いていたので、主ぬしはないのだと申しますのに、そんならその主のない家に持つて行って置いて来いと仰おつしやったのには、実に驚きましたのでござります。」

「はははは。己は頑固だからなあ。」

「どう致しまして。あれがわたくしの一生の教訓になりましたのでござりました。もうお暇いとまを致します。」

「泊まって行かんか。己の内は戦地と同じで御馳走はないが。」

「奥様はいらっしゃりませんか。」

「妻は此間死んだ。」

「へえ。それはどうも。」

「島村が知っているが、まるで戦地のような暮らしを遣っているのだ。」

「それは御不自由でいらっしゃりましょう。つまらないことを申し上げて、お召替のお邪魔を致しました。これでお暇を致します。」

麻生は鶏を島村に渡して、鞋をびちやびちや言わせて帰って行った。

石田は長靴を脱いで上がる。雨覆を脱いで島村にわたす。島村は雨覆と靴を持って勝手へ行く。石田は西の詰の間に這入って、床の間の前に往って、帽をそこに据えてある将校行李（こうり）の上に置く。軍刀を床の間に横に置く。これを初て来た日に、お時婆あさんが床の壁に立て掛けて、叱られたのである。立てた物は倒れることがある。倒れば刀が傷む（とう）。壁にも痕（きず）が附くかも知れないというのである。

床の間の前には、子供が手習に使うような机が据えてある。その前に毛布が畳んで敷いてある。石田は夏衣袴（なつゐこ）のまま毛布の上に胡坐（あぐら）を掻いた。そこへ勝手から婆あさんが出て来た。

「鳥はどうしなさりますかのかの。」

「飯めしの菜さいがないのか。」

「茄子なすに隠元いんげんまめ豆が煮えておりますが。」

「それで好いいい。」

「鳥は。」

「鳥は生かして置け。」

「はい。」

婆あさんは腹の中で、相変らず吝嗇けちな人だと思った。この婆あさんの観察した処では、石田に二つの性質がある。一つは吝嗇である。肴さかなは長浜の女が盤はん台だいを頭の上に載せて売りに来るのであるが、まだ小鯛こだいを一度しか買わない。野菜が旨うまいというので、胡き瓜りや茄子ばかり食っている。酒はまるで吞のまない。菓子は一

買つて来いと云われて、名物の鶴の子を買つて来た処が、「まずいなあ」と云いながら皆平たいらげてしまつて、それきり買つて来いと云わない。今一つは馬鹿だということである。物の直段ねだんが分らない。いくらと云つても黙つて払う。人が土産を持って来るのを一々返しに遣る。婆あさんは先ずこれだけの観察をしているのである。

婆あさんが立つとき、石田は「湯が取つてあるか」と云つた。「はい」と云つて、婆あさんは勝手へ引込んだ。

石田は、裏側の詰の間に出る。ここには水みず指さしと漱茶碗うがいちやわんと湯を取つた金かな盥んだらいとバケツとが置いてある。これは初の日から極めてあるので、朝晩とも同じである。

石田は先ず楊枝ようじを使う。漱すすをする。湯で顔を洗せんう。石鹼せっけんは七十銭位の舶来品はくらいひんを使つかっている。何故なぜそんな贅ぜい沢たくをするかと人が問とうと、石鹼せっけんは石鹼せっけんでなくてはいけない、贗物にせものを使つかう位なら使つかわないと云いっている。五分刈頭ごぶんざりかみを洗せんう。それから裸はだかになつて体ていじゆうを丁寧ていねいに揩ふく。同じ金盥しもうゆで下湯しもゆを使つかう。足を洗せんう。人が穢きたないと云いうと、己おのれの体ていは清潔せいせつだと云いっている。湯ゆをバケツばけつに棄すてる。水みづをその跡あとに取とつて手拭てふきを洗せんう。水みづを棄すてる。手拭てふきを絞しぼつて金盥しもうゆを揩ふく。又手拭てふきを絞しぼつて掛かける。一日いちにちに二度にどずつこれだけの事ことをする。湯屋ゆやには行いかない。その代り戦地せんちでも舎營しゃえいをしてしている間は、これだけの事ことを廃やせないのである。

石田は襦袢袴じゆばんこした下したを着替かえて又夏衣袴なつぎこしたを着きた。常つねの日は、寝巻ねまき

に湯帷子ゆかたを着るまで、このままでいる。それを客が来て見て、「野木さんの流義か」と云うと、「野木閣下の事は知らない」と云うのである。

机の前に据わる。膳が出る。どんなにゆっくり食っても、十五分より長く掛かったことはない。

外を見れば雨が歇やんでいる。石田は起たつて台所に出た。飯を食っている婆あさんが箸はしを置くのを見て「用ではない」と云いながら、土間に降りる縁えんに出た。土間には虎吉が鳥に米を蒔まいて遣つて、蹲しゃがんで見ている。石田も鳥を見に出たのである。

大きな雄おんどり鶏である。総身の羽が赤褐色で、頸くびに柑こうじ子色の領くびま巻きがあつて、黒い尾を長く垂れている。

虎吉は人の悪そうな青黒い顔を挙げて、ぎよろりとした目で主人を見て、こう云った。

「旦那。こいつは肉が軟やわらかですぜ。」

「食うのではない。」

「へえ。飼って置くのですか。」

「うむ。」

「そんなら、大屋さんの物置に伏籠ふせごの明いているのがあつたから、あれを借りて来ましょう。」

「買うまでは借りても好い。」

こう云つて置いて、石田は居間に帰つて、刀を吊つて、帽を被かぶつて玄関に出た。玄関には島村が磨いて置いた長靴がある。それ

を庭に卸して穿く。がたがたいう音を聞き附けて婆あさんが出て来た。

「お外套がითは。」

「すぐ帰るからいらん。」

石田は鍛冶町を西へ真直に鳥町まで出た。そこに此こないだ間名刺を置いて歩いたとき見て置いた鳥屋がある。そこで牝めんどり鶏を一羽買って、伏籠を職人に注文して貰うように頼んだ。鳥は羽の色の真白な、むくむくと太ったのを見立てて買った。跡から持たせておこすということである。石田は代を払って帰った。

牝も鶏を持って来た。虎吉は鳥屋を厩の方へ連れて行って何か話し込んでゐる。石田は雌めすおす雄を一しよに放して、雄鶏が片かたかた々の羽

をひろげて、雌の周囲まわりを半圈状に歩いて挑むのを見ている。雌はとかく逃げよう逃げようとしているのである。

間もなく、まだ外は明るいのに、鳥は不安の様子をして来た。

その内、台所の土間の隅に棚たなのあるのを見附けて、それへ飛び上がろうとする。塹ねぐらを捜すのである。石田は別当に、「鳥を寝かすようにして遣れ」と云つて居間に這はい入った。

翌日からは夜明に鶏が鳴く。石田は愉快だと思つた。ところが午後引けて帰つて見ると、牝鶏が二羽になつている。婆あさんに問えば、別当が自分のを一羽いっしよに飼わせて貰いたいと云つたということである。石田は嫌いやな顔をしたが、咎とがめもしなかつた。二三日立つうちに、又牝鶏が一羽殖えて雄鶏共に四羽になつた。

今度のも別当ので、どこかから貰つて来たのだということであつた。石田は又嫌な顔をしたが、やはり別当には何とも云わなかつた。

四羽の鶏が屋敷中をあさつて歩く。薄井の方の茄子畠なすばたけに侵入して、爺さんに追われて帰ることもある。牝鶏同志で喧嘩けんかをするので、別当が強い奴を掴つかまえて伏籠に伏せて置く。伏籠はもう出来て来た新しいので、隣から借りた分は返してしまつたのである。鳥屋とやは別当が薄井の爺さんにことわつて、縁の下を為切しきつて拵こしらえて、入口には板切と割竹とを互たがいちがい違ちがひに打ち附けた、不細工な格子戸はを嵌めた。

或日婆あさんが、石田の司令部から帰るのを待ち受けて、こう

云った。

「別当さんの鳥が玉子を生んだそうで、旦那様が上がるなら上げてくれえと云いなさりますが。」

「いらんと云え。」

婆あさんは驚いたような顔をして引き下がった。これからは婆あさんが度々^{たびたび}卵の話をする。どうも別当の牝鶏に限って卵を生んで、旦那様のは生まないというのである。婆あさんはこの話をするたびに、極めて声を小さくする。そして不思議だ不思議だという。婆あさんはこの話の裏面に、別に何物かがあるのを、石田に発見して貰いたいのである。ところが石田にはどうしてもそれ^しが分らないらしい。どうも馬鹿なのだから、分らないでも為^しよう

がない。そこでじれつたがりながら、反復して同じ事を言う。しかし自分の言うことが別当に聞えるのは強いので、次第に声は小さくなるのである。とうとうしまいには石田の耳の根に摩すり寄つて、こう云つた。

「こねえな事を言うては悪うござりますが、玉子は旦那様の鳥も生まんことはござりません。どれが生んでも、別当さんが自分の鳥が生んだというのでござりますがな。」

婆あさんはおそろおそろこう云つて、石田が怒つて大声を出さねば好いがと思つていた。ところが石田は少しも感動しない。平気な顔をしている。婆あさんはじれつたくてたまらない。今度は別当に知れても好いから怒つて貰いたいような気がする。そして

とうとう馬鹿に附ける葉はないとあきらめた。

石田は暫く黙しばらつていて、極めて冷然としてこう云った。

「己は玉子が食はいたがゆいたいたいときには買かうて食くう。」

婆あさんは齒痒はがゆいのを我慢するといいう風で、何か口の内でぶつぶつ云いながら、勝手へ下くだった。

七月十日は石田が小倉へ来てからの三度目の日曜日でああった。

石田は早く起きて、例の狭い間まで手て水みづを使つかった。これまでは日

曜日にも用事がああったが、今日けふは始はじめて日曜日らしく感かんじた。寝巻ねまきの浴帷ゆかた子こを着きたままで、兵児帯へこおびをぐるぐると巻まいて、南側みなみの裏縁うら

に出いた。南みなみ国こくの空そらは紺こん青じょういろに晴はれていて、蜜柑みつだんの茂さかみを

洩もれる日ひが、きらきらした斑はん紋もんを、花壇はなだんの周まわり圍りの砂すなの上うへに印しるし

ている。厩には馬の手入をする金櫛かなぐしの音がしている。折々馬が足を踏み更えるので、蹄鉄ていてつが厩の敷板に触れてことごとくという。そうすると別当が「こら」と云つて馬を叱っている。石田は気がのんびりするような心持で、朝の空気を深く呼吸した。

石田は、縁の隅に新聞反古ほんごの上に、裏と裏とを合せて上げてあつた麻裏を取つて、庭に卸して、縁から降り立った。

花壇のまわりをぶらぶら歩く。庭の井戸の石畳いそにいつもの赤い蟹かにのいるのを見て、井戸を上から覗くと、蟹は皆隠れてしまう。苔こけの附いた弔瓶つるべに短い竿さおを附けたのが抛り込ほうんである。弔瓶と石畳との間を忙いそしげに水みず馬すましが走っている。

一本の密柑の木を東へ廻ると勝手口に出る。婆あさんが味噌汁

を煮ている。別当は馬の手入をしまつて、蹄ひづめに油を塗つて、勝手に来た。手には飼かい桶おけを持つてゐる。主人に会釈をして、勝手に置いてある麦箱の蓋ふたを開けて、麦を飼桶に入れてゐる。石田は暫く立つて見ている。

「いくら食うか。」

「ええ。これで三杯ぐらいが丁度宜よろしいので。」

別当はぎよろつとした目で、横に主人を見て、麦箱の中に抛り込んである、縁ふちの虧かけた轆轤ろくろ細工の飯鉢めしぼちを取つて見せる。石田は黙つて背中を向けて、縁側のほうへ引き返した。

花壇の処まで帰つた頃に、牝鶏が一羽けたたましい鳴声をして足元に駈けて来た。それと一しよに妙な声が聞えた。まるで聒々

児この鳴なくようにやかましい女の声である。石田が声の方角を見ると、花壇の向うの畠はしを為切しきった、南隣の生垣の上から顔を出している四十くらいの女がいる。下しも太ぶとりのかぼちやのように黄いろい顔で頭あたまのてっぺんには、油固あぶらめの小さい丸まる鬚まげが載のっている。これが声の主である。

何か盛まんにしやべっている。石田は誰に言いっているかと思おもって、自分の周囲まわりを見廻まわしたが、別に誰たれもいない。石田の感かんずる所ところでは、自分に言いっているとは思おもわれない。しかし自分に聞きせる為ために言いっているらしい。日曜日にっようびで自分の内うちにいるのを候うかがっていてしやべり出したかと思おもわれる。謂いわば天下てんかに呼号こゝろして、旁かたわら石田いしだをして聞きかしのめんとするのである。

言うことが好くは分からない。一体この土地には限らず、方言というものは、怒って悪口を言うような時、最も純粹に現れるものである。目上の人に物を言ったり何かすることになれば、修飾するから特色がなくなってしまう。この女の今しやべっているのが、純粹な豊前語である。

そこで内のお時婆あさんや家主の爺さんの話と違って、おおよその意味は聞き取れるが、細かい nuances は聞き取れない。なんでも鶏が垣を躓^こえて行つて畠を荒らして困まるということらしい。それを主題にして堂々たる *Philippica* を発しているのである。女はこんな事を言う。豊前には諺^{ことわざ}がある。何町歩とかの畑を持たないでは、鶏を飼つてはならないというのである。然るに借家ずま

いをしていて鶏を飼うなんぞというのは僭越せんえつもまた甚はなはだしい。サアベルをさして馬に騎のっているものは何をしても好いと思うのは心得違である。大抵こんな筋であつて、攻撃余力を残さない。女はこんな事も言う。鶏が何をしているか知らないばかりではない。傭婆やといばあさんが勝手の物をごまかして、自分の内の暮しを立てているのも知るまい。別当が馬の麦をごまかして金を溜ためようとしているのも知るまい。こういうときは声を一層張り上げる。婆あさんにも別当にも聞せようとするのである。女はこんな事も言う。借家人すの為することは家主の責任である。サアベルが強こわくて物が言えないようなら、サアベルなんぞに始から家を貸さないが好い。声はいよいよ高くなる。薄井の爺さんにも聞せようとするのである。

る。

石田は花壇の前に棒のように立って、しゃべる女の方へ真向まむきに向いて、黙って聞いている。顔にはおりおり微笑の影が、風の無い日に木葉このはが揺らぐように動く外には、何の表情もない。軍服を着て上官の小言を聞いている時と大抵同じ事ではあるが、少し筋肉が弛ゆるんでいるだけ違う。微笑の浮ぶのを制せないだけ違う。

石田はこんな事を思っている。鶏は垣を越すものと見える。坊主が酒を般若湯はんやとうというところとは世間に流布しているが、鶏を鑽籬菜さんりさいというところは本を読まないものは知らない。鶏を貰った処が、食いたくもなかったので、生かして置こうと思つた。生かして置けば垣も越す。垣を越すかも知れないということ

まで、初めに考えなかつたのは、用意が足りないようではあるが、何を為^するにもそんな [eventualite'] を眼中に置いては出来ようがない。鶏を飼うという事実には、この女が怒るといふ事実が附帯して来るのは、格別驚くべきわけでもない。なんにしろ、あの垣の上に妙な首が載つていて、その首が何の遠慮もなく表情筋を伸縮させて、雄弁を揮^{ふる}つてゐる処は面白い。東京にいた時、光線の反射を利用して、卓の上に載せた首が物を言うように思わせる見世物を見たことがあつた。あれは見世物師が余り [pretentieux] であつたので、こつちの反感を起して面白くなかつた。あれよりは此方が余程面白い。石田はこんなことを思つてゐる。

垣の上の女は雄弁家ではある。しかしいかなる雄弁家も一の論

題に就いてしやべり得る論旨には限がある。垣の上の女もとうとう思想が涸渴こかつした。察するに、彼は思想の涸渴を感ずると共に失望の念を作なすことを禁じ得なかつたであろう。彼は経験上こんな雄弁を弄ろうする度に、誰か相手になつてくれる。少くも一言くらい何とか言つてくれる。そうすれば、水の流が石に触れて激するやうに、弁論に張合が出て来る。相手も雄弁を弄することになれば、旗鼓相当きこつて、彼の心が飽き足るであろう。彼は石田のような相手には始めて出逢つたろう。そして暖簾のれんに腕押をしたような不愉快な感じをしたであろう。彼は「ええとも、今度来たら締めてしまふから」と言い放つて、境の生垣の蔭へ南かぼちや瓜かぼちやに似た首を引込めた。結末は意味の振ふるつてゐる割に、声に力がなかつた。

「旦那さん。御膳が出来ましたが。」

婆あさんに呼ばれて、石田は朝飯を食いに座敷へ戻った。給仕をしながら婆あさんが、南裏の上さんは評判の悪者で、誰も相手にならないのだというような意味の事を話した。石田はなるだけ鳥を伏籠に伏せて置くようにしろと言いつけた。その時婆あさんは声を低うしてこういうことを言った。主人の買つて来た、白い牝鶏が今朝は卵を抱いている。別当も白い牝鶏の抱いているのを、外の牝鶏が生んだのだとは言いにいと見えて黙っている。卵をたった一つ孵かえさせるのは無駄だから、取つて来ようかと云うのである。石田は、「抱いているなら構わずに抱かせて置け」と云つた。

石田は飯を済ませてから、勝手へ出て見た。まだ縁の下の鳥屋とやの出来ない内に寝かしたことのある、台所の土間の上の棚が藁わらを布しいたままになっていた。白い牝鶏はその上に上がっている。常からむくむくした鳥であるのが、羽を立てて体をふくらまして、いつもの二倍位の大きさおおきになって、首だけ動かしてあちこちを見ている。茶碗を洗っていた婆あさんが来て鳥の横腹をつつく。鳥は声を立てる。石田は婆あさんの方を見て云った。

「どうするのだ。」

「旦那さんに玉子を見せて上げようと思ひまして。」

「廃よせ。見んでも好い。」

石田は思い出したように、婆あさんにこう云うことを問うた。

世帯を持つとき、ます柵を買った筈だが、別当はあれで麦を量りはしないかと云うのである。婆あさんは、別当の柵を使ったのは見たことがないと云った。石田は「そうか」と云って、ついで部屋に帰った。そして将校行李の蓋を開けて、半切毛布に包んだ箱を出した。Havanaの葉巻である。石田は平生てんぐ天狗のの呑んでいて、これならどんな田舎いなかに行軍をしても、補充の出来ない事はないと云っている。偶たまには上等の葉巻を呑む。そして友達と雑談をすると、こんごうせき金剛石入の指環ゆびわを嵌めた金持の主人公にManilaを吞ませる」なぞと云って笑うのである。石田が偶に呑む葉巻を毛布にくるんで置くのは、火薬の保存法を応用しているのである。石田はこう云っている。己おれだつて大将に

でもなれば、烟草たばこも毎日新しい箱を開けるのだ。今のうちは箱を開けてからひとつき一月も保存しなくてはならないのだから、工夫を要すると云っている。

石田は葉巻に火を付けて、さも愉快げに、ひとつすい一吸吸って、例の手習机に向つた。北向の表庭は、さるすべり百日紅まばらの疎な葉越に、日が一ぱいにさして、夾竹桃にはもうとところどころ花が咲いている。向いの内の糸車は、今日もぶうんぶうんと鳴っている。

石田は床の間の隅に立て掛けてある洋書の中から [La Bruyère] の性格という本を抽ぬき出して、短い鋭い章を一つ読んではじつと考えて見る。又一つ読んではじつと考えて見る。五六章も読んだかと思うと本を措おいた。

それから舶来の象牙紙ぞうげしと封筒との箱入になつてゐるのを出して、ペンで手紙を書き出した。石田はペンと鉛筆とで万事済ませて、硯すずりというものを使わない。稀まれに願届ねがひつゝなぞがいれば、書記に頼む。それは陸軍に出てから病氣引ひきこもり籠かごをしたことがないという位だから、めつたにいらぬ。

人から来た手紙で、返事をしなくてはならないのは、函囊すのうの中に入れてゐるのだから、それを出して片端から返事を書くのである。東京に、中学に這入つてゐる息子を母に附けて置いてある。第一に母に遣る手紙を書いた。それから筆を措かずに二つ三つ書いた。そして母の手紙だけを将校行李にしまつて、外の手紙は引き裂いてしまつた。

午ひるになった。飯を済ませて、さつき手紙を書き始めるとき、灰

皿の上に置いた葉巻の呑みさしに火を附けて、北表の縁えんに出た。

空はいつの間にか薄い灰色になっている。汽車の音がする。

「蝙蝠傘こうもりがさ張替修繕は好うがすの」と呼んで、前の往来を通るものがある。糸車のぶうんぶうんは相変らず根調をなしている。

石田はどこか出ようかと思つたが、空模様が変わっているので、止やめる気になつた。暫くして座敷へ這入つて、南アフリカの大きい地図をひろげて、この頃戦争が起りそうになっている Transvaal の地理を調べている。こんな風で一日は暮れた。

三四日立つてからの事である。もう役所は午ひる引びけになつてゐる。

石田は馬に蹄鉄ていてつを打たせに遣つたので、司令部から引掛ひきがけに、

むらさきがわ
紫 川の左岸の狭い道を常磐橋の方へ歩いていると、戦役
以来心安くしていた中野という男に逢った。中野の方から声を掛ける。

「おい。今日は徒歩かい。」

「うむ。鉄を打ちに遣ったのだ。君はどうしたのだ。」

「僕のは海に入れに遣った。」

「そうかい。」

「非常に喜ぶぜ。」

「そんなら僕も一遍遣つて見よう。」

「別当が泳げなくちやあだめだ。」

「泳げるような事を言っていた。」

中野は石田より早く卒業した士官である。今は石田と同じ歩兵少佐で、大隊長をしている。少し太り過ぎている男で、性質から言えば老実家である。馬をひどく可哀がる。中野は話を続けた。

「君に逢つたら、いつか言つて置こうと思つたが、ここには大きな溝どぶに石を並べて蓋ふたをした処があるがなあ。」

「あの馬ば借しゃくに往ゆく通とだらう。」

「あれだ。魚うお町まちだ。あの上を馬で歩いちやあいかんぜ。馬は人間とは目方が違うからなあ。」

「うむ。そうかも知れない。ちつとも気が附かなかつた。」

こんな話をして常磐橋に掛かつた。中野が何か思い出したという様子で、歩度を緩めてこう云つた。

「おう。それからも一つ君に話しておきたいことがあった。馬鹿な事だがなあ。」

「何だい。僕はまだ来たばかりで、なんにも知らないんだから、どしどし注意を与えてくれ給え。」

「実は僕の内の縁がわからは、君の内の門が見えるので、妻さいの奴が妙な事を発見したというのだ。」

「はてな。」

「君が毎日出勤すると、あの門から婆あさんが風炉敷包ふうろしきづつみを持って出て行くというのだ。ところが一昨日おとといだったかと思う、その包が非常に大きいというので、妻がひどく心配していたよ。」

「そうか。そう云われれば、心こころあたり当あたがある。いつも漬物を切ら

すので、あの日には茄子と胡瓜を沢山に漬けて置けと云ったのだ。
」

「それじゃあ自分の内へも沢山漬けたのだろう。」

「はははは。しかしとにかく難^{ありがと}有う。奥さんにも宜しく云つてくれ給え。」

話しながら京町の入口まで来たが、石田は立ち留まった。

「僕は寄つて行く処があつた。ここで失敬する。」

「そうか。さようなら。」

石田は常磐橋を渡つて跡へ戻つた。そして室^{むろまち}町の達見^{たつみ}へ寄つて、お上さんに下女を取り替えることを頼んだ。お上さんは狎^{ちん}の頭をさすりながら、笑つてこう云つた。

「あんた様は婆あさんがええとお云いなされたがな。」

「婆あさんはいかん。」

「何かしましたかな。」

「何もしたのじゃない。大分えらそうだから、丈夫な若いのをよこすように、口入の方へ頼んで下さい。」

「はいはい。別品さんを上げるように言うて遣ります。」

「いや、下女に別品は困る。さようなら。」

石田はそれからかえりがけ帰掛かに隣へ寄つて、薄井じいの爺いさんに、下女の若いのが来るから、どうぞお前さんの処の下女を夜だけ泊りに来させて下さいと頼んだ。そして内へ帰つて黙っていた。

翌日口入の上さんが来て、お時婆あさんに話をした。年寄に骨

を折らせるのが気の毒だと、旦那が云うからと云ったそうである。婆あさんは存外素直に聞いて帰ることになった。石田はまだ月の半ばであるのに、一箇月分の給料を遣った。

夕方になって、口入の上さんは出直して、目見えめみの女中を連れて来た。二十五六位の髪の薄い女で、お辞儀をしながら、横目で石田の顔を見る。襦袢じゆばんの袖そでにしている水浅葱みずあさぎのめりんすが、一寸位袖口から覗のぞいている。

石田は翌日島村を口入屋へ遣つて、下女を取り替えることを言い付けさせた。今度は十六ばかりの小柄で目のくりくりしたのが来た。気性もはきはきしているらしい。これが石田の気に入った。

二三日置いてみて、石田はこれに極めた。比那古ひなこのもので、春

というのだそうだ。男のような肥ひご後ご詞ことばを遣つかつて、動作も活潑である。肌こはくに琥珀色の沢つやがあつて、筋肉が締ひまつている。石田は精せい悍いかんな奴だと思つた。

しかし困る事には、いつも茶のたてしま豎たて縞しまのひとえもの単ひとえもの物を着ているが、膝の処にはふたところ一二所ばかりつぎが当あつている。それで給仕をする。汗臭い。

「着物はそれしか無いのか。」

「ありません。」

平気で微笑を帯びて答える。石田は三枚持つている浴帷ゆかた子こを一いっ枚遣やつた。

一週間程立つた。春と一しよに泊らせていた薄井の下女が暇を

取つて、師団長の内へ住み込んだ。春の給料が自分の給料の倍だ
というので、羨ましがって主人を取り替えたそうである。そこで
薄井では、代かわりに入れた分の下女を泊りによこさないことになつた。
石田は口入の上さんと呼んで、小女こおんなをもう一人傭やといたいと云つ
た。上さんが、そんなら内の娘をよこそうと云つて歸つた。

口入屋の娘が来た。年は十三で久というのである。色の真黒な
子で、頗すこぶる不潔で、頗る行儀が悪い。翌朝五時ごろにぷつとい
妙な音がするので、石田は目を醒さました。後に聞けば、勝手では
朝起きて戸を閉めるまで、提ちようちん灯に火を附けることにしている。
提灯の柄えの先に鉤かぎが附いているのを、春はいつも長押なげしの釘くぎに懸け
ていたのだそうだ。その提灯を久に持つていろと云つたところが、

久が面倒がつて、提灯の柄で障子を衝き破つて、提灯を障子にぶら下げたということである。石田は障子に穴のあるのが嫌で、一々自分で切張をしているのだから、この話を聞いて嫌な顔をした。石田は口入屋の上さんと呼んで、久を返したいと云つた。返して代を備う積であつた。ところが、上さんは何が悪いか聞いて直させると云う。何一つ悪くないことのない子である。石田は窮して、なんにも悪くはない。女中は一人で好いと云つた。

石田は達見に往つて、第二の下女の傭聘を頼んだ。お上さんは狎をいじりながら、石田の話を聞いて、にやりにやり笑つてゐる。そしてこう云うのである。

「あんたさん、立派なお妾でも置きなさればええにな。」

「馬鹿な事を言っちゃいかん。」

とにかく頼むと言い置いて、石田は帰った。しかし第二の下女はなかなか来ない。石田はどうとう若い下女一人を使っていることになった。

三四日立った。七月三十一日になった。朝起きて顔を洗いに出ると、春が雛ひよこの孵かえたのを知らせた。石田は急いで顔を洗って台所へ出て見た。白い牝鶏の羽の間から、黄いろい雛の頭のぞが覗のぞいているのである。

商人が勘定を取りに来る日なので、旦那が帰ってから払うと云えと、言い置いて役所へ出た。午ひるになって帰ってみると、待つているものもある。石田はノオトブックにペンで書き留めて、片端

から払った。

晩になってから、石田は勘定を当つてみた。小倉に来てから、始て纏まとまつた一月間の費用を調べる事が出来るのである。春を呼んで、米はどうなっているかと問うてみると、丁度米櫃こめびつが虚からになつて、跡は明日あした持つて来るのだと云う。そこで石田は春を勝手へ下らせて、跡で米の量を割つてみた。陸軍で極きめている一人一日精米六合というのを廻はるかに超過している。石田は考えた。自分はどうしても兵卒の食う半分も食わない。お時婆あさんも春も兵卒ほど飯を食いそうにはない。石田は直すぐにお時婆あさんの風炉敷包の事を思い出した。そして徐しずかにノオトブックを将校行李うちの中へしまった。

八月になつて、司令部のものもてんでに休暇を取る。師団長は家族を連れて、船小屋の温泉へ立たれた。石田は纏まつた休暇を貰わずに、隔日に休むことにしている。

表庭の百日紅に、ぽつぽつ花が咲き始める。おりおり蝉せみの声に向いの家の糸車の音にまじる。六日は日曜日で、石田の処ところへも暑中見舞の客が沢山来た。初め世帯を持つときに、渋紙しぶがみのようなもので拵こしらえた座布団を三枚買った。まだ余り使わないのに中に入れた綿が方々に寄つて塊かたまりになつてゐる。客が三人までは座布団を敷かせることが出来るが、四人落ち合うと、畳んだ毛布の上に据すわらせられる。今日などはとうとう毛布に乗つたお客があつた。

客は大抵帷子かたびらに袴はかまを穿はいて、薄羽織を被きて来る。薄羽織は勿も

ちろん論、袴というものも石田などは持つていないのである。石田はこんな日には、朝から夏衣袴なついきこを着て応対する。

客は大抵同じような事を言つて帰る。今年は暑が去年より軽いようだ。小倉は人氣が悪くて、物価が高い。殊ことに屋賃をはじめ、将校の階級によつて価あたが違ふのは不都合である。休暇を貰つても、こんな土地では日の暮らしようがない。町中まちじゆうに見る物はない。温泉場に行くにしても、二日市ふつかいちのような近い処はつまらず、遠い処は不便で困る。先ずこんな事である。石田は只はあ、はあと返事をしてゐる。

中には少し風流がつて見る人もある。庭の方を見て、海が見えないのが遺憾だと云つたり、掛物を見て書画の話をしたりする。

石田は床の間に、軍人に賜わった勅語を細字に書かせたのを懸けている。これを將校行李に入れてどこへでも持って行くばかりで、外に掛物というものは持っていないのである。書画の話なんぞが出ると、自分には分らないと云つて相手にならない。

翌日あたりから、石田も役所へ出掛に、師団長、旅団長、師団の参謀長、歩兵の聯隊長、それから都督と都督部参謀長との宅位に名刺を出して、それで暑中見舞を済ませた。

時候は段々暑くなって来る。蝉の音が、向いの家の糸車の音と同じように、絶間なく聞える。夕^{ゆうなぎ}風の日には、日が暮れてから暑くて内ににくい。さすがの石田も湯帷子^{ゆかた}に着更^{きか}えてぶらぶらと出掛ける。初のうちは小倉^{こくら}の町を知ろうと思つて、ぐるぐる廻

った。南の方は馬借からきたかた北方の果まで、北方には特科隊が置いてあるので、好く知っている。そこで東の方へ、舟を砂の上に引き上げてある長浜の漁師村のはずれまで歩く。西の方へ、道普請に使う石炭屑が段々少くなって、天然の砂の現れて来る町を、西鍛冶屋町のはずれまで歩く。しまいには紫川の東の川口で、あさひ旭町まちという遊廓ゆうかくの裏手になっている、お台場の址あとが涼むには一番好いと極めて、材木の積んであるのに腰を掛けて、夕風の蒸暑い盛を過すことにした。そんな時には、今度東京に行ったら、三本足の床しょうぎ几を買って来て、ここへ持って来ようなんぞと思っている。

か孵ひよこえた雛は雌であつた。至極丈夫で、見る見る大きくなる。大

きくなるに連れて、羽の色が黒くなる。十日ばかりで全身真黒になつてしまつた。まるで鴉からすの子のようである。石田が掴つかまえようとすると、親鳥が鳴くので、石田は止やめてしまふ。

十一日は陰暦の七たなばた夕の前日である。「笹ささは好しか」と云つて歩く。翌日になつて見ると、五色の紙に物を書いて、竹の枝に結び附けたのが、家いえごと毎ごとに立ててある。小倉にはまだ乞巧きこう奠でんの風俗が、一般に残つているのである。十五六日になると、「竹の花は立たてはなたてはいりませんか」と云つて売つて歩く。孟蘭盆うらぼんが近いからである。

十八日が陰暦の七月十三日である。百日紅の花の上に、雨が降つたり止んだりしている。向いの糸車は、相変らず鳴っているが、

蝉の声は少しとぎれる。おりおり生垣の外を、はだし 跣足の子供が、

「花はな柴しば々々」と呼びながら、走つて通る。しきみ 櫛しきみを売るのである。

雨の歇やんでいる間は、ひどく蒸暑い。石田はこの夏中で一番暑い日のように感じた。翌日もやはり雨が降つたり止んだりして蒸暑い。夕方に町に出てみると、どの家にもぼんどうろう 盆燈籠とが点してある。

中には二階を開け放して、数十の大燈籠を天井に隙間なく懸けている家がある。長浜村まで出てみれば、盆踊が始まっている。浜の砂の上に大きなわ 圈わを作つて踊る。男も女も、手拭のほおかむり 頬ほ冠かむりをして、着物の裾を片折はしよつて帯に挟はさんでいる。襪たびはだしもあるが、多くは素足である。女でしるし 印しるし絆ばん纏てんに三尺帯を締めて、ももひき 股引ももひきを穿はかずにいるものもある。口々にくどき 口説くどきというものを歌つて、「え

ときつさ」と囃す。^{はや}好いとさの訛^{なまり}であろう。石田は暫く見ていて帰った。

雛は日にまし大きくなる。初のうち油断なく庇^{かば}っていた親鳥も、大きくなるに連れて構わなくなる。石田は雛を畳の上に持つて来て米を遣る。段々馴れて手^{てのひら}掌に載せた米を啄^{ついば}むようになる。又少し日が立つて、石田が役所から帰って机の前に据わると、庭に遊んでいたのが、走って縁に上つて来て、鶴^{つるはし}嘴を使うような工合に首を *sagittale* の方向に規則正しく振り動かして、膝^{そでば}の傍に寄るようになる。石田は毎日役所から帰^{かえりがけ}掛に、内が近くなると、雛の事を思い出すのである。

八月の末に、師団長は湯治場^{とうじば}から帰られた。暑中休暇も残少な

になった。二十九日には、土地のものが皆地蔵様へ詣るといふので、石田も寺町へ往つて見た。地蔵堂の前に盆燈籠の破れたのを懸け並べて、その真中に砂を山のように盛つてある。男も女も、線香に火を附けたのを持って来て、それを砂に立てて置いて帰る。中一日置いて三十一日には、又商人が債かけを取りに来る。石田が先月の通に勘定をしてみると、米がやつぱり六月と同じように多くいつている。今月は風炉敷包を持ち出す婆あさんはいなかつたのである。石田は暫く考えてみたが、どうも春はお時婆あさんのような事をしそうにはない。そこで春を呼んで、米が少し余計にいろようだがどう思うと問うて見た。

春はくりくりした目で主人を見て笑っている。彼は米の多くい

るのは当前だと思ふのである。彼は多くいるわけを知っているのである。しかしそのわけを言つて好いかどうかと思つて、暫く考へている。

石田は春に面白い事を聞いた。それは別当の虎吉が、自分の米を主人の米櫃こめびつに一しよに入れて置くという事実である。虎吉の給料には食料が這入つている。馬糧なんぞは余り馬を使わない司令部勤務をしているのに、定則だけの金を馬糧屋に払つてゐる。だから虎吉が随分利益を見ているということ、石田は知つてゐる。しかし馬さえ瘦やせさせなければ好いと思つて、あなぐろうとはしない。そうしてあるのに、虎吉が主人の米櫃に米を入れて置くことにして、勝手に量り出して食うというに至つては、石田と

いえども驚かざることを得ない。虎吉は米櫃の中へ、米をいくら入れるか、何遍入れるか少しも分らないのである。そうして置いて、量り出す時にはいくらでも勝手に量り出すのである。段々春の云うのを聞いて見れば、味噌も醤油も同じ方法で食っている。内で漬ける漬物も、虎吉が「この大きい分は己おれの茄子だ」と云つて出して食うということである。虎吉は食料は食料で取つて、實際食う物は主人の物を食っているのである。春は笑つてこう云つた。割木わりきも別当さんの「見せ割木」で、いつまで立つても減ることはないと云つた。勝手道具もそうである。土間に七しちりん釐が二つ置いてある。春の来た時に別当が、「壊れているのは旦那ので、満足なのは己のだ」と云つた。その内に壊れたのがまるで使えな

くなつたので、春は別当と同じ七釐で物を煮る。別当は「旦那の事だから貸して上げるが、手めえはお辞儀をして使え」と云つているということである。

石田は始て目の開いたあような心持がした。そして別当の手腕に對して、少からぬ敬意を表せざることを得なかつた。

石田は鶏の事と卵の事を知っていた。知つて黙許していた。然るに鶏と卵とばかりではない。別当には [systematiquement] に發展させた、一種の面白い經理法があつて、それを万事に適用しているのである。鶏を一しよに飼つて、生んだ卵を皆自分で食うのは、唯この systeme を鶏に適用したに過ぎない。

石田はこう思つて、覚えほほえず微笑んだ。春が、若もし自分のこんな

話をしたことが、別当に知れては困るといふのを、石田はなだめて、心配するには及ばないと云った。

石田は翌日米櫃やら、漬物桶やら、七釐やら、いろいろなものを島村に買い集めさせた。そして虎吉を呼んで、これまであつた道具を、米櫃には米の這入^{はい}っているまま、漬物桶には漬物の這入っているままで、みんな遣つて、平気な顔をしてこう云った。

「これまで米だの何だのが、お前のと一しよになつていたそうだが、あれは己が気が附かなかつたのだ。己は新しい道具を買つたから、これまでの道具はお前に遣る。まだこの外にもお前の物が台所にまぎれ込んでゐるなら、遠慮をせずに皆持つて行つてくれい。それから鶏が四五羽いるが、あれは皆お前に遣るから、食う

とも売るとも、勝手にするが好い。」

虎吉は呆れたような顔をして、石田の云うことを聞いていて、石田の詞が切れると、何か云いそうにした。石田はそれを言わずにこう云った。

「いや。お前の都合はあるかも知れないが、己はそう極めたのだから、お前の話を聞かなくても好い。」

石田はついと立って奥に這入った。虎吉は春に、「旦那からお暇ひまが出たのだかどうだか、伺つてくれろ」と頼んだ。石田は笑つて、「己はそんな事は云わなかつたと云え」と云った。

その晩は二十六夜待やまちだといふので、旭町で花火が上がる。石田は表側の縁に立って、百日紅の薄黒い花の上で、花火の散るのを

見ている。そこへ春が来て、こう云った。

「今別当さんが鶏を縛って持って行きよります。雛ひよこは置ここうかと云いますが、置けと云いまっしょうか。」

「雛なんぞはいらんと云え。」

石田はやはり花火を見ていた。

青空文庫情報

底本：「阿部一族・舞姫」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年4月20日発行

1985（昭和60）年5月20日36刷改版

1994（平成6）年12月15日54刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

鶏
森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>